

マリアさまを見た少女

ベルナデッタ

文 坂牧 俊子

絵 矢車 涼



マリアさまを見た少女

ベルナデッタ

文 坂根 俊子

絵 矢車 涼



女子パウロ会



ルルドの聖母

はじめに

みなさんは、教会や学校のお庭で、「ルルド」とよばれる場所を見たことがありませんか？

岩の上の、ほら火のような所に、白い服を着て、青い帯をした、マリヤさまの姿が立っているでしょう。

どうして、教会のなかでなく、こんな所にマリヤさまがいらっしゃるのでしょうかね。

また、みなさんは、フランスに、「ルルドの奇蹟」とよばれるふしぎな泉のあるの女、聞いたことがありますか？

「ルルド」って、なんでしょう。

「奇蹟の原」^{マジック・ランド} 読んでしようか。

「これからお話しするメルナツタをどうかわいい少女が、それを知っています。」

「メルナツタの物語は、メルナツタのお話です。メルナツタの物語を聞いてください。」

ね。

もくじ

はじめに

Ⅰ はら穴の青婦人

美しい人 ^{うつくしいひと} の

ますしい一家 ^{ますしいいけ} 22

十五日間のお約束 ^{いそごひかたのちかぞえ} 28

ツヤコノノ書 ^{つやこののしよ} 32

原の原見 ^{はらのはらみ} 35



Ⅰ
ほら穴の貴婦人





美しい人



「さあ、こまった。もう、まきがないわ。マリィ、カーブ川の近くへでも行って、かれ枕を売めてきてくれない？」

お昼のしたくをしとまうとしていたお母さんが言いました。

「わたしも行くわ！」

ちやうど、遊びに来ていた、いとこのジャンヌが、元気に立ちあがりました。

「あたしも行かせて！」

そばにいたベルナデッタも、たのみました。

「あなたは、だめよ、ベルナデッタ。外は寒いんだから。ゆづんも、せまがひやなうたでしょ！」

ベルナデッタは、マリーのお母さんですが、体が弱いのです。

「でも、へやのなかにいるより、外の空気をすったほうが気持ちがいいの。ねえ、おねがい！　あたたかくしていくから。」

ベルナデッタは、手をあわせて、お母さんにためみました。

「しようがないおね。じや、ずきんもぬすれずにかぶっていくのよ。」

お母さんは、そう言っつて、三人を送りだしました。

おさないむすめたちは、町をぬけ、遠くのガリーブ川の川原に遊びました。

ジャンヌとマリーは、ならんでおしやべりをしたり、からったりしながら、先を歩いていきます。ベルナデッタは、せきが痛るといけないので、進みたいのがまんして、少しゆっくり歩いていますが、ほんとうは、よねよわしい子ではなくて、はがらから、いたずらっ子でもあるのです。

やがて、三人は、マッサビエルとよばれるはら火のある所へ来ました。

「あ、見てよ。川の前に、かれがあんなたくさん。」

ジャンヌが、うれしそうに、流れの向こうがわを指さしました。

「ほんとだ！　何、マッサー。」

マリーとジャンヌは、すぐはくつとくつ下をぬいで、浅い川をおたりはじめました。

「きやあ、冷たい。」

ふたりは、水のような水に足をつけたとたんに、跳びました。つづいてわたろうとしたベルナデッタは、それを聞いて、自分の新装と、お母さんのことを思いだしました。

もし、そんな冷たい水に足を入れたら、きつとまたひどいせきが、はじまるにちがいないのです。

「ねえ、おねがい。水のなかに、二つか三つ石を投げてくださいない？　あたし、そこをおたつていくから。」

「だめよ。はだしになつて、わたしたちのしたまふに、わたつていらふっさい。」

もう、かれ牧師的に夢中になつてゐるふたりは、言ふことを聞いてくれません。しかたがないので、ベルナデッタは、しよしぶくつとくつ下をぬぎはじめました。

そのときです。

とつぜん、大風のような音が聞こえました。はっとしたベルナデッタは、まわりの本を見ましたが、少しもゆれていません。へんだなと思ひながら、くつ下をぬぐうとすると、また、同じ音がしました。

ベルナデッタは、これくわつて立ちあがり、向こう岸のふたりをよぼうとしましたが、声が出ません。そのとき、ほかの本は、ゆれてゐないのに、向こうのほら穴の入り口にはげつてゐる野ばらや、雑草だけが、強い風をうけたように、横になびいてゐるのが見えました。

ふしぎに思つて見ていると、穴のなかに、やわらかい光がまして、美しい若い女のかたが、白い服を着て立っているではありませんか。

それは、ベルナデッタが、いままで見たこともないほど美しい婦人でした。

そのかたは、白い長い髪に、青い帯をしめ、かみを少し見せて白いベールをかぶり、両足には、黄色いばらがついていました。右の手には、金のくさりといひ玉のロザリオ（聖母マリアのとりのつばをわがっているときに使う、玉をつなぎあわせるもの）をもち、ベルナデッタのほうを見て、にっこり手まねをさしたのです。

ベルナデッタは、ゆめでも見たのかと思ひ、目をこすつたり、まばたきしたりしましたが、そのかたは消えませんが、ほんとうは、こわいはずなのですが、にげだしたいというより、そこにずっといたいような、喜びでいっぱいになるような、そんな気持ちでした。

そのうち、ベルナデッタは、こくしぜんに、スカートのポケットにいつも入れてゐる、自分のロザリオをとり返して、おいのりをするようにひざまずきました。そして、十字架のしるしをしようとしたのですが、どうしたことか、手が動きません。すると、女のかたは、ゆっくりと手をあげて、とんでも美しく、十字架のしるしをなさしていました。ベルナデッタがまねしてゐると、こんどはじょうずにできました。